Wuthering Heights における二つの台所と Nelly Dean

佐久間　千　尋

Emily Brontë の *Wuthering Heights* (1847) の終焉において、語り手 Nelly Dean は、聞き手でもう一人の語り手でもある Lockwood に、"They [Joseph and a lad] will live in the kitchen, and the rest will be shut up." (Brontë 337)[1] と告げる。この引用は、ネリーは女主人の Cathy[2] と一緒に Thrushcross Grange へ移り住み、Wuthering Heights には Joseph たちが住むだろうという、将来の予測を述べたありふれた台詞に見受けられる。ジョゼフは、物語冒頭から登場する召使であるから、台所に住まうと言っても、なにぶん問題視するようなことではない。しかし、台所が『嵐が丘』の中で、様々な重要な出来事が起こっている場所である、という特異性を備えていることを考慮に入れると、このネリーの台詞を容易に看過することはできない。台所に住まう、ということは、台所が、閉め切られる家の中で、唯一開かれたまま残される空間、すなわち生命を保ち続ける空間である、ということを意味する。では、なぜ、残される室内空間が台所であるのか。そして、まだ見ぬ未来のこととして不明瞭であるにもかかわらず、なぜ、ネリーは一年後の予測を早々とロックウッドに、また我々読者に提示して見せるのか。

台所とは、一つの屋敷に一つは存在する、欠くことのできない室内空間である。しかしながら、概して小説の中において、この空間が舞台として用いられる例は、さほど見受けられない[3]。台所が一般に小説の舞台となりにくい理由は、その場を占めるのが召使やコックなど、使用人であるということが挙げられよう。召使たちの間でのロマンスでも起こらない限り、台所が舞

台として用いられる可能性は低い。ゆえに、『嵐が丘』の台所は、主人公たちの核心に直接的にかかわってくる、殊に重要な事実を明らかにする場面に用いられているという点で、非常に傑出している。

一緒に生まれ育った姉妹である Charlotte や Anne の小説群と比較しても、エミリの唯一の小説、『嵐が丘』がもつ特異性は際立っている。小説において、家と登場人物とは、切っても切り離せない関係にある。Leonard Lutwack も指摘しているように、居住空間はしばしば、住人の趣味嗜好によって変化させられ、雰囲気を定義づけられる[4)]。ブロンテ作品には共通して、家あるいは内部の仕切られた空間である部屋が、登場人物とかかわりあっているという特徴が見られる。Daniel Pool は、イギリス小説の中の多くの場面が、壮大な響きを持つ名前の家で繰り広げられていると述べ、スラッシュクロス・グレンジやシャーロットの *Jane Eyre* (1847) の Thornfield Hall の名前を挙げている[5)]。たとえば、『ジェーン・エア』において、ジェーンが六回も家を転居しているということは注目に値すべきであるし、さらには、赤い部屋や屋根裏部屋といった、ジェーンにとって転機をもたらす特別な意味を持つ空間も存在する[6)]。また、アンの *The Tenant of Wildfell Hall* (1848) でも、ヒロインの Helen は隠遁生活を含めて数カ所を転々とし、その中でも彼女が住まうことによって変化するワイルドフェル・ホールの様子は象徴的に描かれている[7)]。このように、ブロンテ姉妹の小説における家とその内部空間は、登場人物と密接にかかわっていると言っても過言ではない。しかしながら、シャーロットやアンの小説には、台所という空間が物語の重要性を担う節は見受けられない。では、なぜ、エミリは台所にこだわりをもって描きこんだのだろうか。

本稿では、台所の使われ方を分析することにより、『嵐が丘』における台所という居住空間が持つ意味を明らかにしたい。この作業は、ネリーによる将来の予測の真意に関する一つの解釈を導くと考えている。

I

ワザリング・ハイツの台所の描写は、物語の冒頭から、この作品における台所の存在を密かに主張している。

> One step brought us into the family sitting-room, without any introductory lobby, or passage: they call it here 'the house' pre-eminently. It includes kitchen and parlor, generally, but I believe at Wuthering Heights the kitchen is forced to retreat altogether into another quarter, at least I distinguished a chatter of tongues, and a clatter of culinary utensils, deep within; and I observed no signs of roasting, boiling, or baking, about the huge fire-place; nor any glitter of copper saucepans and tin cullenders on the walls. (下線は筆者 4–5)

ここでは、ワザリング・ハイツの台所が、この土地の家の一般的な構造とは異なり、家の棟から離れた別棟にあることが示されている。つまり、台所は、家の中心部で発生する変化や影響を受けにくい位置にあると考えられる。

ではなぜ、この母屋から離れた空間である台所に、住人たちがこぞって集まろうとするのだろうか。そこには、作者の物語を構成する上での意図がうかがえる。台所は、登場人物が集まるだけでなく、彼らの本音が吐露される空間としての働きも担っている。Heathcliff はワザリング・ハイツの台所で、Edgar Linton に対する羨みの気持ちを素直にネリーに語っている。スラッシュクロス・グレンジで五週間をすごした Catherine は、ヒースクリフと一緒に遊んでいた頃の粗野な様子はすっかり消え去り、レディらしく変貌して帰ってくる。そんなキャサリンの変化に、ヒースクリフは気後れしてしまう。すると、その様子を見かねたネリーは、ヒースクリフに救いの手を差し伸べる。

'Make haste, Heathcliff!' I said, 'the kitchen is so comfortable—and Joseph is upstairs; make haste, and let me dress you smart before Miss Cathy comes out—and then you can sit together, with the whole hearth to yourselves, and have a long chatter till bedtime.' (56)

このとき、ヒースクリフはネリーの申し出に乗ってこなかったが、翌朝、彼は心を入れ替え、「ネリー、僕をきれいにしてくれよ。いい子になるから」(56) と頼む。ネリーの言葉の何が、ヒースクリフに働きかけたのだろうか。もちろん、住人のほとんどから目の敵にされているヒースクリフにとって、ネリーの申し出がこの上ない喜びであったことは、察するに難くない。だが、ここで注目すべきは、ネリーの言葉の「台所はとても快適よ。それに、ジョゼフは二階にいるし」である。文字通り読み取るなら、このフレーズは Hindley Earnshaw の圧制のもと、四面楚歌のヒースクリフをこっそりと救ってあげたいという、ネリーの気持ちの表れである。しかし、もう一つの解釈として、ジョゼフがいない台所、つまりネリーが一人で占有している台所は快適だ、ということを示唆しているとも考えられる。ネリーの言葉には、台所を自由に使用することのできる主である、という自負心を見ることができるのである。その証拠に、ネリーはこの空間において、舌も自由に活性化させることができる。

'And now, though I have dinner to get ready, I'll steal time to arrange you so that Edgar Linton shall look quite a doll beside you: and that he does—You are younger, and yet, I'll be bound, you are taller and twice as broad across the shoulders—you could knock him down in a twinkling; don't you feel that you could?' (57)

召使が、ジェントリーの子息よりも、素性の知れない孤児を援護し激励する。

この台詞は大胆かつユニークなものと捉えられるだろう。だが、ネリーより幼くても、ヒースクリフは現実を見据えている。

> 'But, Nelly, if I knocked him [Edgar] down twenty times, that wouldn't make him less handsome, or me more so. I wish I had light hair and a fair skin, and was dressed, and behaved as well, and had a chance of being as rich as he will be!' (57)

ヒースクリフは、自分とエドガーの生まれながらの身分の違いを嘆く。するとネリーは、「それで、何かといえば、ママァ！と泣き叫んで……男の子に拳を振り上げられたらぶるぶる震えたり、にわか雨が降ったら、一日中家に閉じこもっているのよね」(57) と、さらに辛辣にエドガーを皮肉るのである。後に、ネリーはこのエドガーを主人と仕えることになるのだが、このときのネリーの大胆な発言には、単にヒースクリフに同情したというだけでは足りない皮肉が潜んでいる。使用人のネリーが、階級が上の子息のことをこれだけ扱き下ろせるのも、自分とヒースクリフの他には誰もいない台所だからであり、また、その台所は、母屋から隔たっている場所である。

そして、まさにこの台所において、ネリーの目の前で、物語の転機となる場面が展開される。キャサリンは、この台所でネリーに胸中を告白する。エドガーのプロポーズを受けたものの釈然としないと告げるキャサリンに、ネリーはもったいぶった問答を始める。「なぜ、彼を愛するのですか？」(78) というネリーの問いかけに、キャサリンは思いつくままに答えていくが、どれもネリーを満足させることはできず、ついには「それに、エドガーはお金持ちになるでしょうから、そうしたらわたしはここら辺で一番の身分になれるでしょう。そんな旦那様がいることを誇りに思えるでしょうから」(78) と答え、「一番ダメです！」(79) と一刀両断される。ネリーはこのとき、若干22歳であり、キャサリンとも7つほどしか変わらない年ではあるが、立場の上でキャサリンより優勢に立っている。これも、台所という空間がネリーの管

轄下にあるからと言える。だからこそ、キャサリンに対してしつこいほどの問いかけを浴びせることができているのである。一方のキャサリンは、「どちらに魂が住んでいるにせよ—わたしの魂が、わたしの心が、わたしは間違っていると言っているのよ」(80) と言い、現実主義者的価値観の持ち主であるネリーを混乱させる。

この一連の問答は、ある重要な視点を明らかにする。読者の疑問として沸き起こるのは、ネリーがキャサリンに求めた答えとは一体何だったのだろうか、ということである。なぜ、ネリーはキャサリンの答え、「ハンサムだから」、「一緒にいて楽しいから」、「若くて、陽気だから」だけでは満足しなかったのだろうか。あたかも、キャサリンを畳み掛けて問いただすことで、「それに、エドガーはお金持ちになるでしょうから、そうしたらわたしはここら辺で一番の身分になれるでしょう。そんな旦那様がいることを誇りに思えるでしょうから」という答えを引き出したかったかのように捉えられる。キャサリンは、自らがみた夢について、次のように語る。

> 'I've no more business to marry Edgar Linton than I have to be in heaven; and if the wicked man in there had not brought Heathcliff so low, I shouldn't have thought of it. It would degrade me to marry Heathcliff, now; so he shall never know how I love him; and that, not because he's handsome, Nelly, but because he's more myself than I am. Whatever our souls are made of, his and mine are the same, and Linton's is as different as a moonbeam from lightning, or frost from fire.' (81)

この引用と、先のキャサリンがエドガーのプロポーズを承諾した理由には、ある共通点を見出すことができる。それは、階級に関する言及である。ヒースクリフの出生は最後まで明かされないものの、言わずと知れた孤児である。一方のリントン家は、治安判事 (magistrate) を勤める家柄であることか

らも分かるように、ジェントリーである[8]。キャサリンが生まれ育ったワザリング・ハイツは“farm-house”と称されていることから、パークを所有するスラッシュクロス・グレンジとの規模の差は明白である。ヒースクリフと一緒に垣間見たスラッシュクロス・グレンジの客間の煌びやかさに、キャサリンが憧れるのも無理はない。キャサリンはヒースクリフと結婚しない理由を、共に落ちぶれてしまうからと述べる。その一方で、自分とヒースクリフの魂は同じであって、リントン家のそれとは全く異なると断言するのである。瞥見して、この比較は矛盾をはらんでいることが分かる。魂が同じで惹かれあうのならば、ヒースクリフと結婚すれば良い。それなのに、キャサリンが二の足を踏むのは、ヒースクリフの階級に属さない身分と、リントン家の紳士階級との歴然たる差のせいである。ネリーは、問答を続けることで、キャサリンに、エドガーとヒースクリフを天秤にかけていた胸中を告白させたのである。折りしも、ヒースクリフはこのキャサリンの言葉を聞いて、彼女のこの後に語られる自分への気持ちを聞くことなしに、台所から出て行ってしまう[9]。ネリーはこのキャサリンの長口上の間にヒースクリフの存在に気づいていたのだが、あえてキャサリンにそれを告げていない。Gideon Shunami は、ここでネリーがヒースクリフの存在を隠したことが、キャサリンの後の悲劇の引き金となったと言及し (Shunami 455)、John K. Mathison はこれをネリーの重大な過失としている[10]。しかしながら、これがネリーの過失であったのかどうかの判断は、注意を要する。キャサリンがリントン家から帰ってきたとき、ヒースクリフがネリーに台所で打ち明けていた言葉からも明らかであったように、彼は誰よりも、自らの低い身分を身にしみて嘆いていた。ヒースクリフはリントンとの身分差を痛感し、いくら頑張ったところで、容姿を取り繕ったところで、リントンの身分には勝ち目がないと知っている。だからこそ、彼は身分ごと変貌すべく、忽然と姿を消したのである。ここでのキャサリンとヒースクリフの間には、ネリーが介入している。そして、台所という支配力を発揮できる場において、彼女は二人の本心を聞きだしていると考えられるのである。ネリーがキャサリンの胸中

を聞かせたことで、ヒースクリフは変貌を決意したのである。ネリーは、台所という空間において、自由に口を差し挟み、二人のプライベートに介入している。逆に、台所という空間に身を置いているネリーは、家の内部の上下関係に縛られない、一番安全な場所を確保している存在と言える。

ヒースクリフがエドガー・リントンと対等に闘える男性になるためには、ただ身なりを立派にするだけでは不十分である。財を成し、成功を収め、それゆえの自信を備えた一人の男性としてキャサリンの前に現れねばならない。その決意が実を結んだことは、ネリーによる、帰還後のヒースクリフとエドガーとの比較描写によって明示される。

> He [Heathcliff] had grown a tall, athletic, well-formed man; beside whom my master seemed quite slender and youth-like. His upright carriage suggested the idea of his having been in the army. His countenance was much older in expression and decision of feature than Mr Linton's; it looked intelligent, and retained no marks of former degradation. A half-civilized ferocity lurked yet in the depressed brows, and eyes full of black fire, but it was subdued; and his manner was even dignified, quite divested of roughness though too stern for grace. (下線は筆者 96)

ネリーは、いかにヒースクリフが立派な男性になっているかを詳細に描写する。キャサリンにとって、ヒースクリフの身分のみが障害になっていたのであって、それさえ取り去られてしまえば、魂が共鳴する相手以上に理想的な伴侶はありえない。彼女の意識がヒースクリフに奪われていくのも無理はない、と読者は思ってしまう。ここでのネリーの得意げな報告は、示唆に富んでいる。実際に、キャサリンもこの変化をはっきりと捉えている。

> 'I know you [Edgar] didn't like him [Heathcliff],' she answered,

repressing a little the intensity of her delight. 'Yet for my sake, you must be friends now. Shall I tell him to come up?'

'Here,' he said, 'into the parlour?'

'Where else?' she asked.

He looked vexed, and suggested the kitchen as a more suitable place for him.

Mrs Linton eyed him with a droll expression—half angry, half laughing at his fastidiousness.

'No,' she added, after a while, 'I cannot sit in the kitchen. Set two tables here, Ellen; one for your master and Miss Isabella, being gentry; the other for Heathcliff and myself, being of the lower orders. Will that please you, dear? Or must I have a fire lighted elsewhere? If so, give directions. I'll run down and secure my guest. I'm afraid the joy is too great to be real!' (95–96)

このエドガーとキャサリンのやり取りには、二つの重要な点が指摘できる。一つには、キャサリンがリントン家側ではなく、ヒースクリフの側につく宣言をしているという点である。二つ並べさせるよう命じたテーブルのジェントリーではない方、"being of the lower orders" にキャサリンは自らの身を置くことを選択している。これには、もう一つのポイントが絡んでいる。それは、エドガーが、「ヒースクリフには台所が似合いだ」と言ったことである。エドガーにとって、台所とは普段踏み込まない場所である。しかし、キャサリンは、かつてヒースクリフと共にワザリング・ハイツの台所に出入りしていた。つまり、この時点で、エドガーの価値観とキャサリンのそれには、大きな溝が生じていることが明らかである。しかし、キャサリンはヒースクリフと一緒に台所に行くことは拒否している。このことから、キャサリンはこの時点でリントン夫人としての意識を保っていることがうかがえる。しかしながら、この瞬間は同時に、キャサリンの内で、かつての実家での生活と、

今の生活とのコンフリクトが芽生えるきっかけともなるのである。これ以降、徐々に、彼女の意識は、かつて幼少時代を一緒に過ごしたヒースクリフの方へと傾いていく。

この三角関係は、スラッシュクロス・グレンジの台所において修羅場を迎え、物語を通しての山場となる。ネリーは台所の窓から、庭にいるIsabellaを口説いているヒースクリフを見て大声で叫び、それを聞いたキャサリンは、まもなく台所に入ってきた彼を咎める。ネリーが媒介者となって、キャサリンとヒースクリフの間の歪を生む種をまいていることになる。キャサリンとヒースクリフは、イザベラに関して口論を始め、頃合を見計らって、ネリーが行動に出る。

> ...I left them [Heathcliff and Catherine] to seek the master, who was wondering what kept Catherine below so long.
>
> 'Ellen,' said he, when I entered, 'have you seen your mistress?'
>
> 'Yes, she's in the kitchen, sir,' I answered. 'She's sadly put out by Mr Heathcliff's behaviour: and, indeed, I do think it's time to arrange his visits on another footing. There's harm in being too soft, and now it's come to this—.' And I related the scene in the court, and, as near as I dared, the whole subsequent dispute. I fancied it could not be very prejudicial to Mrs Linton, unless she made it so, afterwards, by assuming the defensive for her guest.
>
> Edgar Linton had difficulty in hearing me to the close—His first words revealed that he did not clear his wife of blame. (113)

このように、ネリーはエドガーを捜しに行き、彼に事情を話して台所の二人に加わるよう働きかけている。「エドガー様は奥様を捜しておられました」という付言は幾分不自然な動機に聞こえ、その上、エドガーにあらましを話しているということからも、ネリーが意図的に主人を台所に行くように仕向け

たと言っても過言ではない。ネリーはヒースクリフの出入りを禁じるようにとエドガーを促すが、幼い頃のキャサリンとヒースクリフの親交を目の当たりにしてきたネリーならば、キャサリンがヒースクリフの出入り禁止を容認するはずがないと察することは可能である。つまり、ネリーはこの後起こるであろう出来事を予測しつつも、事態を誘因するかのような状況を作り上げているのである。その証拠が、次の台詞に表れている。キャサリンとヒースクリフの結託に打ちのめされたエドガーは、ヒースクリフに一撃を浴びせると、助っ人を呼びに、台所から出て行く。

> 'He is not coming,' I interposed, framing a bit of a lie. 'There's the coachman, and the two gardeners, you'll surely not wait to be thrust into the road by them! Each has a bludgeon, and master will, very likely, be watching from the parlour windows to see that they fulfil his orders.'
>
> The gardeners and coachman *were* there; but Linton was with them. They had already entered the court—Heathcliff, on second thoughts, resolved to avoid a struggle against three underlings; he seized the poker, smashed the lock from the inner door, and made his escape as they tramped in. (116)

ネリーは、事実を曲げて伝えることで、ヒースクリフを追い出す。善意に解釈すれば、ネリーは機転が利く人物だといえるのだろうが、場所が台所であるということと、彼女が主人を台所の修羅場に呼び入れていることを総じて考え合わせると、ネリーの行動がリントン夫妻の間の歪みを生じる原因になっていることは否めない。

II

さらに興味深いことには、ネリーには、台所以外の場所には、あえて介入

しない傾向が見られる。ここでは、双方の家の居間に注目することで、台所でのネリーの態度との比較を試みる。

ヒースクリフが失踪したことを知ったキャサリンは、嵐の中ずぶ濡れのまま、炉辺で夜を明かす。翌朝、居間へ降りてきたヒンドリーは、キャサリンのただならぬ様子に驚き、訳を尋ねる。キャサリンは、いやいやながら、「雨に濡れたので、寒いだけです」(86) と答える。それに加えて、ネリーは「お嬢様は、昨夜雨の中を走り出て行って、夜中ここに座っていたんですよ。どう説得しても動かないんですから」(86) と言う。ネリーの意図は、「私たちは、隠しておける間は、ヒースクリフがいなくなったことを言いたくありませんでした。ですから、私はお嬢様がどういうわけで夜更かしする気になったのか分かりません、とお答えしました。お嬢様は何も言いませんでした」(86) ということであった。この後、ジョゼフによってすべてが明るみに出てしまうのだが、ここでのネリーは、台所でキャサリンに説教していた姿勢とは異なったポジションをとっている。彼女は、言わないことで、事態に踏み込むことから身を退いているのである。この家の主人であるヒンドリーは、妻を連れてワザリング・ハイツに戻ってきてから、ジョゼフとネリーを台所へ追いやり、彼自身が居間 (the house) を占有すると宣言する[11)]。ネリーは主人の支配下にある居間においては、台所のときのような気ままな発言を控えざるを得ないことがうかがえる。

三年後にこの地へ戻ってきたヒースクリフは、スラッシュクロス・グレンジを訪ね、ネリーに女主人への取次ぎを頼む。ネリーが二階の居間へ入っていくと、リントン夫妻が窓際に座っている。

> Both the room, and its occupants, and the scene they gazed on, looked wondrously peaceful. I shrank reluctantly from performing my errand: and was actually going away, leaving it unsaid, after having put my question about the candles, when a sense of my folly compelled me to return, and mutter:

'A person from Gimmerton wishes to see you, ma'am.'

'What does he want?' asked Mrs Linton.

'I did not question him,' I answered.

'Well, close the curtains, Nelly,' she said; 'and bring up tea. I'll be back again directly.'

She quitted the apartment; Mr Edgar inquired carelessly, who it was?

'Some one the mistress does not expect,' I replied. 'That Heathcliff, you recollect him, sir, who used to live at Mr Earnshaw's.'

'What, the gipsy—the plough-boy?' he cried. 'Why did you not say so to Catherine?'

'Hush! you must not call him by those names, master,' I said. 'She'd be sadly grieved to hear you. She was nearly heartbroken when he ran off; I guess his return will make a jubilee to her.' (94–95)

ネリーは、女主人に来訪者を告げる際、「ヒースクリフ」とは言わずに、「ギマートンからの来訪者」とのみ告げる。「本当は言わずに去ろうとした」というネリーの逡巡は、コロンでつながれる一文に示されているだけに、言い訳のような印象を与える。一方でキャサリンも、来訪者が誰なのか、と問うことなしに、自らすぐ会いに行く。つまり、キャサリンは、ネリーの奥歯に物が挟まったような物言いから、来訪者を察していたのではないかと推測できるのである。その後のネリーの動向も、注目すべきものである。キャサリンが出て行ったあと、エドガーから「誰が来たのか」と尋ねられたネリーは、ようやく「ヒースクリフ」と答えるが、「なぜキャサリンにそう言わなかったのか」という問いには直接答えることなしに、ひらりとかわす。ネリーのこの姿勢は、エドガーに対して不誠実であるだけでなく、この後の混乱を招く結果ともなる。なぜ、ヒースクリフだと言わなかったのか。もし、エドガーに味方する気があったなら、ヒースクリフの来訪を直に告げ、キャサリンに

会わせることなしに、その後の混乱を排除することも可能だったはずである。しかし、ネリーは積極的に言葉をさしはさんだり、ヒースクリフから言いつけられたことを違えたりはしない。台所においては、進んで意見を述べていた彼女は、逆に居間という、主人たちの空間においては、言わないことで事態の収拾をはかろうとする。主人の支配にある居間においては、ネリーはあえて口出しをしないことで、身を退いた傍観者のポジションをとっていると考えられる。

このネリーの姿勢は、キャサリンにとって、致命的ともいえる打撃を与えることとなった場面においても見ることができる。スラッシュクロス・グレンジの台所でのヒースクリフとエドガーの対決にショックを受け混乱してしまったキャサリンは、居間へと移動する。そこでネリーに、「もし、ヒースクリフと友達でいられないのなら—エドガーがさもしいやきもち焼きになるのなら、わたしは自分をめちゃくちゃに壊して、あの人たちの心も粉々にするわ」(116) と言う。ネリーはこれについて特に発言することなく、女主人を残して部屋の外へ出る。そこで、居間にやって来るエドガーに出会うが、わざわざ後戻りをして彼らのやり取りを聞く[12]。エドガーから "Will you give up Heathcliff hereafter, or will you give up me? It is impossible for you to be *my* friend, and *his* at the same time; and I absolutely *require* to know which you choose." (117) と問い詰められたことで、キャサリンはひどい錯乱状態に陥ってしまう。ここでのエドガーの問いかけは、彼にとって苦悩の二者択一であったことがうかがえる。というのも、彼は夫であるにもかかわらず、キャサリンに対して "*my* friend" という表現を使っているからである。夫なのだから、キャサリンに対してもっと支配的な強気な姿勢を示してもいいはずだが、おそらくエドガーは、台所でのヒースクリフとキャサリンの協調性に腰が引けてしまったのだろうと察せられる。一方、この "*my* friend" は、妻のキャサリンにとって、まるで三行半を突きつけられたかのようなショックを与える。キャサリンはエドガーの問いかけに答えることができず、「独りにしてって言ってるでしょ！……お願いだから！わた

しがこれ以上耐えられないって、分からないの？エドガー、あなたってば……もう、放っといて！」(117) と叫ぶとベルを鳴らし、そのベルに応じて、実は居間の外に控えていたネリーが「ゆっくりと」(leisurely) 入って行くのである。そして、常軌を逸したキャサリンの様子に恐れるエドガーを宥め、てきぱきと事態を収拾する。ネリーは、台所では己の意志によって状況に介入しているが、居間においては、自ら介入することは避け、むしろ主人や女主人の命令を受けて動いているという相違点を見出すことができる。

III

このように、台所という空間の意義を検証するに際し、ネリー・ディーンの存在は非常に大きい。ここで、ネリー・ディーンという人物について概観しておくことが必要だろう。ネリーについては、これまでも、語り手という論点から様々な人物像が提示されてきた。シャーロット・ブロンテは "a specimen of true benevolence and homely fidelity" (lii)[13] と好意的な見解を述べているが、その後の数多くの批評を瞥見すると、ネリーに対する皮肉的解釈が目に付く。中でも、有名なのは、ネリーは明白な "villain" であると述べた James Hafley[14] や、"unreliable narrator" であるとした Gideon Shunami[15] である。他に、V. S. Pritchett はネリーのことを "a spy, a go-between"[16] と述べている。また、Frank Goodridge は、ネリーには読者に常識的判断を提示する役目があると指摘し、Arnold Kettle も同様の見解を示している[17]。『嵐が丘』における母親の不在を心理学的アプローチから論じた Philip K. Wion は、ネリーは重要な "mother figure" であると述べる[18]。ネリーは、聞き役でもう一人の語り手であるロックウッドとは異なり、語り手であると同時に物語の傍観者、時には事件に介入する当事者でもあるため、Mathison も注意を喚起しているように、読者は彼女の話すストーリーの信憑性を疑う気持ちなしに読み進むことは難しくなる[19]。我々読者は、常にネリーのフィルターを通して物語に接しなければならない。ゆえに、『嵐が丘』のどのテーマを論じるにしても、必ずネリーの存在がかかわってくるの

である。

ネリーは、ワザリング・ハイツ、スラッシュクロス・グレンジの両家に仕える経歴を持つ召使である。彼女を表すのには“servant”と“housekeeper”、両方の単語が用いられている。「家政婦」(housekeeper) は、女性の使用人たちの一番上に君臨する役職である。「彼女の仕事は女性の召使を束ねて管理し、特に邸内の奥様、お嬢様の身の回りの世話が行き届くように配慮をすること」(小林 48)[20] であった。“farm-house”であるワザリング・ハイツには、ジョゼフの他には、女性の召使は一人しか雇っていないようである。ただ、ヒンドリーの傍若無人ぶりがひどくなったことで、「召使たちは耐え切れず、ジョゼフと私だけが残りました」(66) とネリーは言っているため、ヒンドリーが家主となる以前には他にも何人か召使がいたことがほのめかされている。ヒンドリーの没後に、ネリーの後任として、名前の語られないネリーの知り合いの女性召使が雇われる。彼女はリントン・ヒースクリフが家にやってきてから二年後に辞め、その後任にはネリーとは面識のなかった Zillah が勤める。ロックウッドが最初にワザリング・ハイツを訪れたときにいたジラは、ネリーによって“housekeeper”と表現されているため、ネリーのこの家での立場も、台所での食事の仕度を含む、住人のあらゆる身の回りの世話をあずかる家政婦であったと考えられる。ただし、ネリーは幼い頃から母親と一緒にこの家にやってきて、ヒンドリーの遊び相手もしていたため、ただの使用人より家族に馴染んでいることは特筆すべき点である。

ネリーは、キャサリンの結婚に際して、スラッシュクロス・グレンジへと移り住む。パークを所有するジェントリーのこの屋敷には、人数を確認することは難しいものの、御者や庭師などを含む複数の使用人が常時いたことは推測できる。実際、19 世紀のイギリスでは、馬車と召使を所有することが、富裕層のしるしとみなされていた (Pool 218)[21]。つまり、ヒースクリフが衝撃を受けた客間のきらびやかな描写が物語っているように、治安判事であるリントンの屋敷、スラッシュクロス・グレンジは、ヴィクトリア朝社会のジェントリーを体現している家であると言える。ネリーは、キャサリンたっ

ての希望によりスラッシュクロス・グレンジへついていったということから、召使というよりは、「標準的には家政婦のすぐ下に位置していて、女主人への責任を一手に引き受け、女主人との親しい個人的な関係から、特別な地位にあった」(Pamela Horn 54) 小間使 (lady's maid) に近い地位であったと考えられる。しかし、キャサリンと一緒に転居したネリーに、使用人の皆をまとめあげる権力があったかどうかは、定かではない。キャサリンの生前には、ネリーは自身を "servant" と表現している[22]。つまり、住人との距離感、住人に対する影響力という点において比較するならば、スラッシュクロス・グレンジという良家よりも、階級の点では劣るワザリング・ハイツの家政婦であったときの方が、大きかったに違いない。また、ネリーとしても、主人や女主人に対し、後者の方がより干渉しやすい状況にあったことは否めない。

しかしながら、ネリーは、台所という空間を利用することで、結果として両家の家政婦としての地位を確立するに至る。ネリーの主人や女主人に対する姿勢は、不可解さを生じる。しかし、それはネリーが台所と居間という空間によって態度を使い分けているがゆえに日和見的姿勢として映るせいである。ネリーは、スラッシュクロス・グレンジにおいては、その姿勢ゆえに、主人のエドガーから解雇を警告されることもある[23]。ネリーは、女主人のキャサリンが亡くなることで、キャシーの乳母役に転換する。この役目のシフトは、ネリーのスラッシュクロス・グレンジでの地位を向上させることになったのではないかと推測できる。ネリーは、居間を占領してキャシーをあやしているとき、イザベラが急に駆け込んでくるのを聞きつけ、女中が騒がしく音を立てたと思い、「おやめなさい！よくもこの部屋でそんなに騒がしくできるわね！リントン様がお聞きになったら、何ておっしゃるでしょう」(171) と、頭ごなしに叱る。この支配的な口調は、Hafley も示唆しているように[24]、ネリーが女中たちより上に立つ家政婦の地位にあることを示している。また、ネリーは家政婦のステータスシンボルとも言うべき鍵束を所持している[25]。このことは、キャシーがリントンからの手紙を隠していた引き出

しを開けて中身を取り出してしまったこと、散歩中にキャシーが道路に面した、鍵のかかった扉の向こう側から戻れなくなった際に、ネリーが鍵束を取り出していることから、明らかである。どちらもキャサリンが亡くなり、キャシーの世話をするようになってからの出来事である。このように、ネリーは、キャシーの乳母になったときに、ジェントリーの屋敷の家政婦の身分へと昇進したことが示唆されているのである。

また、昇進に伴い、ネリー・ディーンの呼称にも、興味深い変化が現れている。ネリー・ディーンは、物語全篇を通じて、「ネリー・ディーン」や「エレン・ディーン」など、人物たちによって様々に呼ばれている。ヒースクリフは幼少期から、主に「ネリー」と呼び習わしていた。しかし、キャシーがリントン・ヒースクリフとの文通をネリーによって遮断され、その後、スラッシュクロス・グレンジから道路に面する扉のところでネリーとキャシーに遭遇した際、“Worthy Mrs Dean” (233) と言っている。これ以後、ヒースクリフは「ネリー」、「エレン」、「ミセス・ディーン」という三つの呼び名をもってネリーに接するのだが、なぜヒースクリフが「ミセス・ディーン」と呼ぶようになったのか、その意識の変化は注目すべきである。

物語を通して判断するに、ネリーは未婚であるから、「ミセス・ディーン」という呼称は、ネリーの家政婦としての腕に向けられた敬称と考えられる。というのも、一般に「敬意の証として……家政婦は未婚既婚を問わず、『ミセス』と呼ばれた」(Pool 220) からである。ロックウッドは物語の最初から、ネリーのことを「ミセス・ディーン」と呼んでいるが、彼がスラッシュクロス・グレンジのテナントとなってこの地にやってきた 1801 年はネリーが語る話の後のことであり、しかもこのときネリーはロックウッドの世話を受け持っていることから、実質上この屋敷を統率する立場にあると分かる。つまり、ネリーの回想において、両家の住人のうちで彼女を「ミセス・ディーン」と呼んだことがあるのは、ヒースクリフだけなのである[26)]。

ヒースクリフは、ただ一人、ネリーが地位を上げたことを感じ取り、家政婦としての権威に敬意を表しているのである。ワザリング・ハイツにいる

ヒースクリフだけが、なぜ感知しえたのか。ヒースクリフは、息子のリントンとキャシーを結婚させるため、リントンを利用して様々な企みを画策していた。キャシーとリントンとの内々の文通も、ヒースクリフが仕組んだことと考えられる。この企みは、ネリーによって察知され、頓挫してしまうことになるが、ヒースクリフは、キャシーに及ぼすネリーの影響力に気づいていたのだろう。この頃になると、エドガーは病床に伏せていることが多く、キャシーの世話は専らネリーに委ねられている。つまり、スラッシュクロス・グレンジで一番力を発揮しうるのがネリーであると、ヒースクリフは気づいていたのである。

IV

さて、非常に示唆的なことに、スラッシュクロス・グレンジの家政婦となったネリーは、再びワザリング・ハイツの台所に帰ってくる。第一世代のときと同じく、再びネリーの支配下にある台所は、第二世代にとっても重要な出来事が繰り広げられる場所となる。この連動性が台所とネリーの密接な関係性を裏付ける。ネリーは、ロックウッドがスラッシュクロス・グレンジを立ち去ってから二週間内に、ヒースクリフからワザリング・ハイツに呼ばれる。ヒースクリフがなぜネリーを呼ぶ気になったのか、ジラがいなくなったということの他に、特に理由は述べられない。ヒースクリフは、小さい居間 (the little parlour) をネリーの部屋にし、そこにキャシーを置いておくように言いつける。しかし、ネリーは、宛がわれた居間よりも、台所で仕事をすることが多く、独りぼっちになってしまうキャシーは、暇をもてあまして台所へとやってくる。そこへ、ヘアトンが介入してくる。というのも、ヒースクリフが家を自分のために使いたいと主張したからである[27]。すると、キャシーは、何かとヘアトンをからかうようになる。これが、二人の親交のきっかけとなるのだから、ネリーがワザリング・ハイツに戻ったことは大きな意味をもたらしたことになる。彼らの親交は、キャシーの働きかけだけではなかなか進まない。折しも、ヘアトンは銃の暴発事故により台所に居座る

ことになり、これがきっかけとなって二人は和解する。そこには、ネリーの存在が鍵となっているのである。

> Catherine employed herself in wrapping a handsome book neatly in white paper; and having tied it with a bit of ribband, and addressed it to 'Mr Hareton Earnshaw,' she desired me to be her ambassadress, and convey the present to its destined recipient. (314)

いくら話しかけても取り付く島のない頑ななヘアトンに、キャシーは本を贈ることを思いつき、その使いをネリーに頼む。ネリーの語り口調は、あたかも自分が仕事をこなすためにそこに居合わせたので、予期せずして橋渡し役を仰せつかったのだと言わんばかりである。だが、「あの二人の結婚式の日には、誰のことも羨ましいなどとは思わないでしょう。イングランドに私以上に幸せな人はいないでしょう！」(316) というネリーの言葉に、自負心からほとばしる誇らしい気持ちを読み取っても、深読みが過ぎることはないだろう。第一世代のキャサリンとヒースクリフの関係に働きかけていたネリーの役割とあわせて鑑みると、第二世代の結合にも彼女自身が意図的に関与したと考えられよう。

では、どうして、ヘアトンとキャシーの和解の場が台所なのか。その疑問がすべてを明らかにする。それは、台所がネリーの支配しうる空間だからというだけではなく、ヒースクリフの目を逃れられる空間だからである。先にも言及したように、主人であるヒースクリフは、ほとんどの部屋を自分のものと主張し、好き勝手に使うことができ、また使っている[28]。この独占欲は皮肉にも、ヒースクリフが敵としていたヒンドリーの専制ぶりとも重なる[29]。また、ワザリング・ハイツの台所は、しばしば住人たちのもう一つの出入り口、裏口として用いられる傾向がある。主人であるヒースクリフは、台所を通る裏口を使うことはあまりなく、それゆえ、台所という奥まった場所 (at Wuthering Heights the kitchen is forced to retreat altogether

into another quarter) に立ち寄る可能性は低い。幼少期にキャサリンと遊んでいたデラシネだった頃には、むしろ台所へと追いやられていたヒースクリフだが、この家の主人となってから第二世代の親交が築かれるまでの間、台所に現れることは稀である。イザベラとヒンドリーによって屋敷から締め出されたとき、台所から入れるようにと命じていたが、それというのも、台所はもう一つの入り口という認識があったからこそである。ヒースクリフは、台所の存在を軽視していた。だからこそ、知らぬ間にキャシーとヘアトンが仲良くなっていたことに驚かざるを得ないのである。ヒースクリフは、ヘアトンとキャシーが庇い合いをする仲良しになったことを知り、「あの女を台所へ放り出せ！」(320) と、怒髪天を突く勢いで憤慨する[30]。また、ロックウッドが訪問し、夕食をとった際にはキャシーに、「おまえはジョゼフと一緒に食事をしろ。……そして、お客が帰るまで台所にいろ」(304) と命じており、このことから、ヒースクリフにとって、台所は今や厄介払いの場所であることが分かる。この盲点を、ネリーはうまく活用したのである。加えて、ヒースクリフから宛がわれた部屋では、ネリーは存分に力を発揮することができない。なぜなら、それはヒースクリフの力が及ぶ空間だからである。こうして、ネリーは小さな居間ではなく、台所に若者たちを寄り集まらせることにより、彼らを結び合わせることに成功するのである。

ネリーが第二世代の親交に意図的に関与していたのか否かは、ロックウッドが再びこの地を訪れ、二軒の家を訪問したとき明かされる。何も知らないロックウッドは、最初にスラッシュクロス・グレンジを訪れる。しかし、「家の者たちは裏の建物に引っ込んでしまったことが、台所の煙突から立ち昇っている、一筋の細く青い煙で分かった。誰も応答がないはずである」(306) と、グレンジに活気はない。そして、ワザリング・ハイツへ行ったとき、彼の驚きは最高潮に達する。かつて、一年前に訪問した際には閉じられていた門はすんなりと開き、「これは進歩だ！」(307) とロックウッドは思う。家の周囲には花々の香りが漂い、「ドアも格子窓も開いている」(307)。ヘアトンとキャシーの仲睦まじい様子を目の当たりにしたロックウッドは、彼らが玄

関から出てくるのを避けるように台所へ向かう。そこにはネリーがジョゼフと一緒にいて、ロックウッドの出現に驚き、「スラッシュクロス・グレンジは全部閉め切ってしまいましたのよ」(308) と告げる。この両家の描写が物語る、明らかな活気の温度差は、台所が家の生命力を担う場所であることを示している。

食べ物をつくる、生み出す空間としての台所は、家には欠くことのできない空間であり、最重要な空間である。しかし、そこにいるべき人物は主人公ではなく、召使や家政婦、コックなど、使用人である。そのため、この重要な空間であるはずの台所は、さほど小説において登場してこなかった空間なのである。しかし、これまで述べてきたように、『嵐が丘』においては、「台所」という空間の役割が大きい。それはネリーという語り手を要した結果であるが、同時に、家の要としての空間をクローズアップする狙いがうかがえるのではないだろうか。また、ここで示されている、スラッシュクロス・グレンジとワザリング・ハイツの台所の対比は、あたかもネリーの住む家が活気を得るのだと言っているかのようであり、また、ネリーの口調も、それを自慢げに述べているようにすら捉えられる。そこには、ヒースクリフ亡き後すべてを牛耳っている自信も顔をのぞかせる[31]。今や、ネリーは、名実共に女主人代行にまで地位を上げることになった[32]。彼女は自分が介入し、また台所を有効利用したことで、地位を高め、影響力をも高めたのである。そして、彼女はきちんと将来の計画も立てている。

> 'They are going to the Grange, then?' I [Lockwood] said.
>
> 'Yes,' answered Mrs Dean, 'as soon as they are married; and that will be on New Year's day.'
>
> 'And who will live here then?'
>
> 'Why, Joseph will take care of the house, and, perhaps, a lad to keep him company. They will live in the kitchen, and the rest will be shut up.' (336–37)

これは、本稿の冒頭に引用した箇所であるが、ネリーは第二世代と一緒にスラッシュクロス・グレンジに移り住み、彼らの監督者としての役割を果たし続けることを決めている。つまり、いかに家が変化しても、結果的に残るのは台所のみであり、それはネリーの監督下にある空間なのである。言い換えれば、台所が息づいてさえあれば、ネリーの影響力は消えない。そして、家の生命力である台所がなくなることはあり得ないのである。台所は、ワザリング・ハイツ、スラッシュクロス・グレンジ両家において、最も安全で不可欠な空間であると言える。それは、まるでネリーの証言が紡いできたストーリーの構造を見透かしているかのようで、エミリ・ブロンテの秀逸且つ綿密な意図が潜んでいるように見えてならない。

このように、物語の核心となる場面が繰り広げられる空間である台所は、家にとって不可欠な空間である。Katherine Frank は、エミリの伝記の中で、彼女が牧師館の中でとりわけ台所にいることを好んだという事実に触れている[33]。確かに、これはエミリの台所へのこだわりを反映していると考えるに足る証拠を提示してくれる。台所は『嵐が丘』において、住人たちの数々の告白を内包する空間である。ネリー・ディーンは、その空間に身を置き、使用人としての任務をこなす傍ら、住人たちの内奥のやりとりに耳を澄ませ、しばしば介入していた。一方で、使用人としての身分をわきまえ、居間という主人たちの空間においては目撃者の立場を選んでいる[34]。語り手であり、目撃者であり、また当事者であるネリーの多面性は、読者にとっては少々無理を感じさせるかもしれない。しかし、台所と居間とを使い分けることで、ネリーは自らの地位を確立し、“farm-house” のワザリング・ハイツだけでなく、ジェントリーのスラッシュクロス・グレンジの家政婦にもなるに至るのである。

註

1) 本稿におけるテキストからの引用は，Emily Brontë, *Wuthering Heights*. London: Penguin, 2003. を使用した．本文中の引用後の括弧内には，ページ数のみ記載する．（以下，適宜 *WH* と略）

2) 『嵐が丘』には，第一世代と第二世代にそれぞれ Catherine が登場するが，便宜上，本稿では第一世代のキャサリンをキャサリン，第二世代のキャサリンをキャシーと呼んで区別する．

3) 後の 20 世紀の小説であるが， Graham Greene は "The Basement Room" (1936) の中で，台所を有効に用いている．この場合になぜ台所が舞台になりえたのかというと，地下室が台所とダイニングをかねた構造になっているということと，主人公の少年を取り巻く夫婦が，少年の屋敷に仕える立場にあるという状況設定が可能にしているのである．(Graham Greene, *Collected Short Strories.* cf. この短編を映画化用に改編したものとして，"The Fallen Idol" (1950) がある．) グリーンの小説には，短編も含め，家の空間が象徴的に用いられているものが見受けられる点で非常に興味深い．

4) Leonard Lutwack は，文学における場所と人物の関係性について，"On the simplest level of allegorical characterization, the place inhabited by a person or being—castle, cave, forest—is merely a sign representing the type of person he is and his function in the story." (*The Role of Place* 69) と述べ，例として，*Wuthering Heights* と *Jane Eyre* を参照している．

5) Daniel Pool は，"Many of the great English novels take place or develop in houses with grand-sounding names—Thrushcross Grange, Thornfield Hall, Ullathorne Court, to name a few." (*What Jane Austen Ate* 194) と家と名前の重要性について触れ，"Examination suggests that some of the generic residence names reveal something about the nature of the dwelling, those that live there, or both." (*ibid.* 194) と，家と住人との関係を指摘する．

6) ジェーンは，紆余曲折の中，Gateshead Hall, Lowood, Thornfield Hall, Moor House, Morton, Ferndean を転々とする．幼少期を過ごしたゲーツヘッドにおいて，Mrs Reed によって，ジェーンは赤い部屋に閉じ込められる (*Jane Eyre.* vol. 1, Ch. 2 参照)．Elaine Showalter は，『ジェーン・エア』をセクシュアリティの観点から論じた中で，赤い部屋は "a paradigm of female inner space" (*A Literature* 114) との見解を示している．

ソーンフィールドでの度重なる奇妙な出来事を不審に思っていたジェーンは，Mr Rochester との結婚式当日に，屋敷の屋根裏部屋に狂人の Bertha Mason（ロチェスター夫人）が監禁されていたことを知る．

7) ヘレンは，Staningley, Grassdale Manor, Wildfell Hall と移り住む．かつて無人だったワイルドフェル・ホールは，ヘレンと Arthur がやってきたことで活気付くが，慎ましく暮らす隠遁生活のため，屋敷の一部のみが息づいている．

8) Pool は，イギリスの地方が厳しい階級性に支配されていたと指摘した上で，"Either to him [squire] or another member of the gentry, perhaps the local clergyman, would fall the post of justice of the peace." (*What Jane Austen Ate* 163–64) と述べ，"Dorothea Brooke's uncle and the senior Mr. Linton in *Wuthering Heights* were nontitled members of the gentry, although they were not squires, and both served as justices of the peace." (*ibid.* 164) と治安判事を任命されるのはジェントリーであると言及．

9) Pool は家具についての記述の中で，"Two articles of more humble furniture —usually found in a tavern or farm home—lent themselves particularly well to the novelist's use, since they could conceal unseen listeners. The

settle was a high-backed bench that could be pulled up to the fire so that the cold drafts in the rest of the room would be kept away." (*ibid.* 197) と背もたれが高い長いすの用途に触れ，ヒースクリフは台所のセトルの陰からキャサリンの言葉を聞いていたと言及している．

10) John K. Mathison は，"Here, perhaps more than anywhere, the reader is sharply aware not only of her failure as an interpreter of the past, but more important, of her failure as a counselor at the time of the action." ("Nelly Dean" 228) と述べている．

11) "...he told Joseph and me we must thenceforth quarter ourselves in the back-kitchen, and leave the house for him." (*WH* 46)

12) "Therefore I said nothing when I met the master coming towards the parlour; but I took the liberty of turning back to listen whether they would resume their quarrel together." (*WH* 117)

13) Emily Brontë, *Wuthering Heights.* "Editor's Preface to the New [1850] Edition of *Wuthering Heights*" (lii) 参照.

Frank Goodridge は，"Few readers today can accept her [Nelly], as Charlotte Brontë did" (*Emily Bronte*: *Wuthering Heights* 20) と述べている．

14) Hafley は，"Ellen Dean is the villain of the piece, one of the consummate villains in English literature" ("The Villain"199) と指摘し，その "villainy" の土台の形成は，ヒースクリフがアーンショー家にやってきたことに起因していると説明．ヒースクリフの世話を怠ったことの責めを負って一時解雇されたことで，ネリーは，自分がアーンショー家の一員ではないと知るに至った．

15) Shunami は，ネリーの性格と語りの構造を結びつけ，"Nelly is not the villain of the novel but that her sanctimonious position results from an ignorance of her true role and a misunderstanding of the spirit of others. She is therefore incapable of recognizing the fact that her decisions bring about the tragic crisis of the novel." ("The Unreliable Narrator" 457) と言う．また，"Ultimately, the interposed framework of a pair of unreliable narrators [Nelly and Lockwood] can only, paradoxically, augment for us the inner story's credibility." (*ibid.* 468) と指摘する．

16) Pritchett は，"There is a faint, homely pretence that Nelly, the housekeeper and narrator, is a kindly, garrulous old body" ("V. S. Pritchett on Unity" 84) だが，"It is not concealed that she is a spy, a go-between, a secret opener of letters." (*ibid.* 84) と述べる．

17) Goodridge は，語り手としてのネリーについて，"As a professional housekeeper and natural busybody, her concern in events is chiefly a practical one, and she represents for us the commonsense point of view." (*Emily Brontë* 20) と述べ，さらに，"Her conventional religious and moral sentiments remind us of normal standards of behaviour, and at the same time are used ironically to stress the inadequacy of those standards and the moral blindness to which they can lead." (*ibid.* 20) と言っている．

Arnold Kettle も語り手としてのネリーとロックウッドの役割について，同様の見解を述べている．"Their function (they the two most 'normal' people in the book) is partly to keep the story close to the earth, to make it

believable, partly to comment on it from a common-sense point of view and thereby to reveal in part the inadequacy of such common sense." (*An Introduction* 132)

18) Philip K. Wion は，"But Nelly is not just the novel's principal representative of the values and functions associated with the ego. She is also its most important mother figure. As such, she may represent, in part, an attempt by Emily Bronte to come to terms with the loss of her own mother, by becoming, in fantasy, a kind of mother of herself." ("The Absent Mother" 328) と，エミリ自身の母親の喪失経験の投影を見ている．

19) Mathison は，"To know her we need to watch her character as it is revealed through her opinions, and, even more, through her reports of her own actions. It is this person, whom we come to know well, whose judgments we finally interpret." ("Nelly Dean and the Power of *WH*" 218) と，ネリーの首尾一貫性のなさを指摘する．

20) 小林章夫『召使たちの大英帝国』東京，洋泉社，2005 年．

21) "Aside from land, carriages and servants were the two sure signs of wealth in nineteenth-century England—so much so, that they were taxed, along with fancy carriages, during the Napoleonic Wars to ensure that the rich paid their share." (Pool, *What Jane Austen Ate* 218) リントン家には御者がいることから，馬車の存在をうかがい知ることができる．

22) エドガーは，キャサリンの錯乱した様子に驚き，ネリーが女主人の状態を知らせなかったことを咎める．すると，ネリーは途端に自己弁護を始める．その中で，'I performed the duty of a faithful servant in telling you, and I have got a faithful servant's wages!'（下線は筆者 *WH* 128）と，自らを "servant" と表現している．

23) エドガーから，病気のキャサリンへの不手際を咎められたネリーは，弁解しようとするが，'The next time you bring a tale to me, you shall quit my service, Ellen Dean' (*ibid.* 128) と釘を刺される．

24) Hafley は，"Nelly is now in truth the mistress of the Grange" ("The Villain" 209) との見解を示し，その裏づけとして，ネリーが女中を叱る行為を挙げている．"She is clearly in command." (*ibid.* 209)

25) Pool によると，"Her [the housekeeper's] mark of office was the great ring of keys she carried wherever she went." (*What Jane Austen Ate* 220) である．また，"a housekeeper might have worked years as a housemaid before being entrusted with the keys to the household storerooms. The butler and the housekeeper, together with the lady's maid and valet—if any—were the upper servants" (*ibid.* 222) ということから，家政婦の地位は長年の相当な下積みを経ねばなれない地位であることが分かる．

26) 他に，ジラもネリーのことを「ミセス・ディーン」と呼んでいるが，彼女は住人ではなく，ネリーとの親交もさほど長くないため，ここでは，紳士階級の家政婦に対する当然の呼び方と考えてよいだろう．なお，テキスト中の呼称についての調査は，*Hyper-Concordance* を参照し，独自に裏付けをとった．

27) "...Hareton was often obliged to seek the kitchen also, when the master wanted to have the house to himself..." (*WH* 310)

28) 注釈 27 参照.
29) 注釈 11 参照.
30) Kettle は，ヒースクリフの変化は，彼がヘアトンとキャシーの関係に自分とキャサリンの関係と同質のものを見出したことから始まっていると述べ，"From the moment that Cathy and Hareton are drawn together as rebels the change begins. For now for the first time Heathcliff is confronted not with those who accept the values of Wuthering Heights and Thrushcross Grange but with those who share, however remotely, his own wild endeavours to hold his right." (*An Introduction* 142) と指摘する．ケトルのマルクス主義の解釈をそのまま本稿に当てはめるのは難しいが，少なくとも，ヒースクリフが不在の台所で誕生した第二世代の結合が，ヒースクリフの主人としての家全体への支配力を根底から揺るがす勢力になったことは，疑いようもない．
31) 'Oh! then it is with Mrs Heathcliff you must settle,' she observed, 'or rather with me. She has not learnt to manage her affairs yet, and I act for her; there's nobody else.' (*WH* 309)
32) Hafley は，ロックウッドはネリーが望んでいた力を獲得したことを知ったと指摘．("The Villain" 213.) また，"the real greed is that by which Nelly has advanced to her position" (*ibid.* 202) と辛辣な見解を述べ，次のように結論づけている．"*Wuthering Heights* is ultimately the dramatization of that perplexity, Heathcliff and Catherine triumphing tragically over the mean success of Nelly Dean; Hareton and Cathy coming through paradoxically both against and for that success." (*ibid.* 214)
33) Katherine Frank は，『嵐が丘』は食べ物や飢え，飢餓に関する話であると述べ，"The story is largely set in kitchens—Emily's own particular domain at the parsonage—not on the heather-covered moors between Wuthering Heights and Thrushcross Grange. The kitchen at the Heights is a room of warmth and comfort, with a roaring fire and the kettle on the hob, but the kitchen is also the stage or arena where the most passionate and violent scenes of the novel take place." (*A Chainless Soul* 220) と，台所の役割について言及している．加えて，台所の場面の例として，キャサリンがネリーに "I *am* Heathcliff" と宣言した場面，エドガーがヒースクリフをグレンジの台所へ追いやろうとしたこと，ヘアトンが銃の事故の後にハイツの台所にいるようになり，キャシーと親交を深めたこと，を挙げている．

また，Bronte Parsonage Museum の "A Souvenir Guide" には，"After Aunt Branwell's death in 1842 Emily acted as housekeeper, helping in the kitchen and baking bread." (22) という言及がある．
34) Pritchett は，"She [Nelly] is as hard as iron, and takes up her station automatically in the battle." ("V. S. Pritchett on Unity" 84) と指摘している．

引用文献

Brontë, Anne. *The Tenant of Wildfell Hall.* 1848. London: Penguin, 1996.
Brontë, Charlotte. *Jane Eyre.* 1847. London: Penguin, 2002.
Brontë, Emily. *Wuthering Heights.* 1847. London: Penguin, 2003.
Brontë Parsonage Museum. Haworth: The Brontë Society, 1998.

Frank, Katherine. *A Chainless Soul: A Life of Emily Brontë.* New York: Ballantine Book, 1990.
Goodridge, Frank. *Emily Brontë: Wuthering Heights.* London: Edward Arnold, 1964.
Greene, Graham. *The Third Man and the Fallen Idol.* London: Heinemann, 1970.
———. *Collected Short Stories.* New York: Penguin, 1986.
Hafley, James. "The Villain in *Wuthering Heights.*" *Nineteenth-Century Fiction.* 13.3 (1958): 199–215.
Horn, Pamela. *The Rise and Fall of the Victorian Servant.* Great Britain: Sutton, 2004.
Kettle, Arnold. "Emily Brontë: *Wuthering Heights.*" *An Introduction to the English Novel.* London: Hutchinson, 1977.
Lutwack, Leonard. *The Role of Place in Literature.* New York: Syracuse UP, 1984.
Mathison, John K. "Nelly Dean and the Power of *Wuthering Heights.*" *The Brontë Sisters: Critical Assessments.* Ed. Eleanor McNees. Vol. 2. Mountfield: Helm Information, 1996. 4 vols. 216–34.
Matsuoka, Mitsuharu. *Hyper-Concordance.* 18 Oct. 2007. 〈http://victorian.lang.nagoya-u.ac.jp/concordance/〉
Pool, Daniel. *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew.* New York: Simon & Schuster, 1993.
Pritchett, V. S. "V. S. Pritchett on Unity with Nature in *Wuthering Heights.*" *The Brontes.* Ed. Harold Bloom. Broomall: Chelsea House, 2000. 84–85. Rpt. of "Books in General." *New Statesman and Nation.* (1946): 453.
Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own.* London: Virago P, 2003.
Shunami, Gideon. "The Unreliable Narrator in *Wuthering Heights.*" *Nineteenth-Century Fiction.* 27.4 (1973): 449–68.
Wion, Philip K. "The Absent Mother in *Wuthering Heights.*" *Wuthering Heights: Case Studies in Contemporary Criticism.* Ed. Linda H. Peterson. Boston: Bedford Books of St. Martin's P, 1992. 315–29.
小林章夫『召使たちの大英帝国』東京，洋泉社，2005年.

（東京女子大学大学院博士後期課程人間科学研究科）